

農林水産大臣賞受賞

高隈の恵みを活かした人々が集うむらづくり

受賞者 ^{たかくま} 高隈地区コミュニティ協議会

(^{かのや} 鹿児島県鹿屋市)

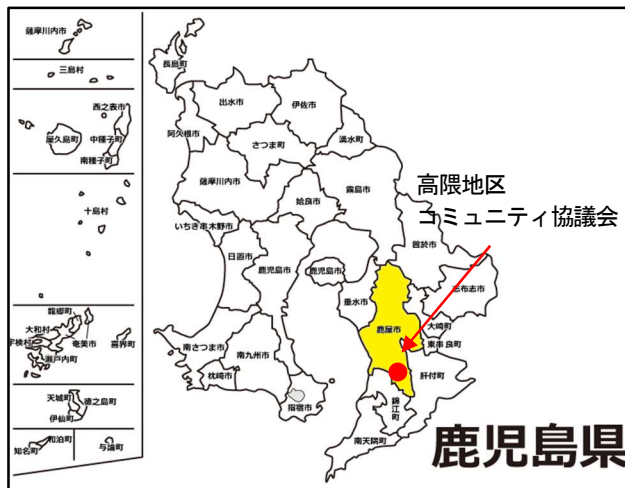
■ 地域の沿革と概要

高隈地区は、標高 1,237m の^{おおのがら}大籠柄岳を主峰とする高隈連山の麓にある農山村地区である。

当地区は、大隅湖や高隈山系等、豊かな自然を有しており、大隅湖に面する県アジア・太平洋農村研修センター（以下、「カピックセンター」）は国際交流の拠点にもなっている。

また、^{かき}棚田の美しい景観や、中津神社の 300 年以上続く「鉤引き祭り」等、住民達が地域資源や伝統行事・文化を大切に守り、歴史と文化の継承に努めている。

第 1 図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

時代の変化に伴う様々な要因により、人口は減少を続けており、少子高齢化も進んでいる状況にある。独居老人の増加に伴う買い物や病院等への交通手段の不安、農業の後継者不足による耕作放棄地の増加等の課題等、地域の課題解決や魅力向上のため、高隈地区の 65 団体・事業所が参加し、「高隈地区まちづくり計画」と実施計画書を策定し、住民が一带となって活動を展開している。

高隈山系の水で生産された美味しい米を地区の特産品として生かすため、耕作田を再生し、高隈米としてイベント等で販売し、自主財源確保に取り組むとともに、高隈のイメージ向上につなげ

第 1 表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	2町内会11自治会
組織の性格	地縁的集団
人口等	総人口 1,381人 総世帯数 792戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 60経営体 個人経営体数 58経営体 団体経営体数 2経営体 (内、法人経営体数) 2経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 795ha 耕地面積 705ha 田 175ha 畑 530ha 耕地率 88.7% 一経営体当たり耕地面積 11.8ha

ている。また、田植・稲刈り行事に保育園児や小中学生・保護者も参加することで、社会教育、学校協働活動にも繋げている。また、大学生と連携した取組も実施し、外部の視点やアイデアを取り入れた活動に取り組んでいる。

若い世代や子供たちも多く参加できるような環境を整備し、歴史や伝統・文化の継承、高齢者の見守り等、次世代への継承活動が生活の中で自然と実施されている。

また、ドライブサロンやお助け隊あったかくマンの創設、ささえあいマップの作成等、地域の困りごとを地域で解決する取組を実施しており、自主的で独自性のある取組を展開している。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

昭和30年当時、5,408人だった高隈地区の人口は、昭和38年から始まった畑地かんがいの水源となる高隈ダム建設で922人が集落移転する等、時代の変化に伴う様々な要因により、減少が続けている。

令和4年現在の地区人口は1,407人と、この10年間で450人減少しており、少子高齢化も進んでいる状況にある。

第2表 令和4年度のサトウキビ栽培実績

年	S30	S40	S50	H14	H24	H29	R2	R3	R4
人口	5,408人	4,356人	3,011人	2,073人	1,857人	1,599人	1,474人	1,422人	1,407人

このような中で、買い物や病院等への交通手段の不安、農業の後継者不足による耕作放棄地の増加等の課題を抱えていた。

これらに対応すべく、町内会を合併する等、地域基盤の強化を進めてきた。

また、設立準備委員会を設立し、「将来のまちづくりを高隈地区全体で考え、課題解決しよう」と、地区住民全体のワークショップ等、60回以上の会議等を重ね、地区の将来像や具体的な取組方策を掲げた「高隈地区まちづくり計画書」を策定した。計画を実現するため、自治会や学校、地元企業等が参加する地域総ぐるみの組織である「高隈地区コミュニティ協議会」を設立するとともに、実施計画書を策定し、様々な地域課題の解決に取り組むこととなった。



写真1 協議会設立に向けた話し合い



写真2 (左) 高隈地区まちづくり計画書
(右) 高隈地区コミュニティ協議会実施計画書

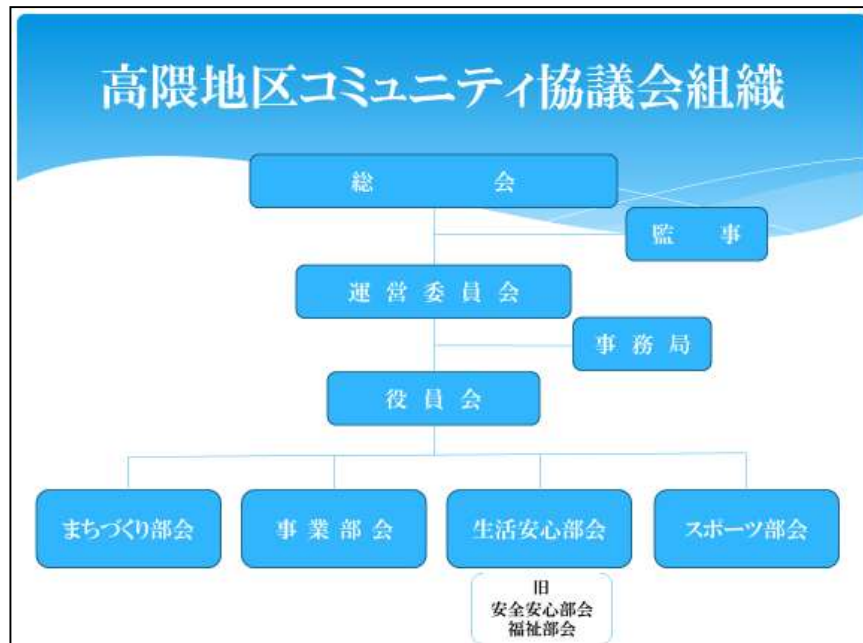
(2) むらづくりの推進体制

ア 高隈地区コミュニティ協議会について

自治会、学校、民生委員、消防、企業等 65 団体で構成され、各組織の枠を越えた活動を展開している。

「高隈の恵みを活かし、人々が集う郷づくり」を将来像に掲げ、地域が抱えている課題の解決を図り、地域の活性化の取組を実施している。

第2図 むらづくり推進体制図



イ 部会活動

① 「まちづくり部会」

自治会、学校、高齢者クラブ代表等で組織し、「人と人との絆でつなぐ郷づくり」をテーマに活動している。

地域の核である学校を応援するため、特認校であることのPRや学校奉仕作業等を実施している。

地域の貴重な施設であり、シンボルである石蔵（昭和初期から使用されていた地域の米蔵）を改修・整備し、ジャンベ教室の開講や昔の農具の展示、イルミネーションの設置、教育講演会、生涯学習発表大会等を行い、人が集う拠点として活用している。



写真3 石蔵でのジャンベ教室

② 「事業部会」

高隈地区内の様々な各事業所や有志の方々に組織し、「特色ある活力に満ちた郷づくり」をテーマに活動している。

耕作放棄地の活用やたかくまコミュニティ米の生産、PR・販売、高隈産業市の開催、鉤引き祭り、国際交流、山菜弁当を活用した民間会社の実施する高隈ツアーの誘致、レンタサイクルの貸出やサイクリングコースの紹介等、高隈地区の観光資源を活かした関係人口づく

りと自主財源確保を実施している。

高限の案内ができるガイドを育成している。

③ 「生活安心部会」

民生委員、PTA、消防団等で組織し、「笑顔があふれ皆で見守る郷づくり」をテーマに活動している。

社会福祉施設や社会福祉協議会と連携し、高齢者の買い物支援とふれあいの場である「ドライブサロン」の運行や介護予防サロン「たかくまおごじょステップ」を開催している。

要介護者・支援者とその介護者を把握するため、地図上に独居高齢者等の情報を書き込み、人と人との関係を線で引き、マップで見える化した「ささえあいマップ」や防災マップの作成、自主防災訓練を実施している。



写真4 たかくまおごじょステップ

④ 「スポーツ部会」

自治会体育部長、部スポーツ推進員等で組織し、「楽しいスポーツを通じて健康で明るい郷づくり」をテーマに活動している。

高齢者の健康増進や世代間交流を図るためのグラウンドゴルフ大会や青少年育成を目的としたバドミントン大会、若者の地域参加を促すためのゴルフ大会等を開催する等、スポーツを通じた地域づくりを実践している。

ウ 公共施設指定管理事業

令和元年度から、火葬場の管理運営を行い、雇用創出と自主財源の確保に取り組んでいる。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

高限地区は、人口減少や高齢化に伴い、日常生活に支援を要する世帯や耕作放棄地が増加し、多くの地域課題に直面していたが、地域での話し合いを重ね、高限地区コミュニティ協議会を設立し、各種課題解決に取り組んでいる。

同協議会は、当県全体の課題である買い物弱者等への支援について、社会福祉施設と連携したドライブサロンを実施する等、生活支援にも力を入れている。

また、有償での生活支援である「お助け隊あったかくマン」の創設は、持続可能な生活支援を実現している。小学生等の若い方も参加を希望しており、幅広い世代で実施されており、地域への愛着を育む場にもなっている。

この他、同協議会では、部会ごとに特色ある取組を進めており、特に農耕地保全のため、休耕田での高限米の生産・販売、山菜弁当を活用したツアー誘致、拠点施設である石蔵を活用したイベント等、創意工夫とアイデア溢れる取組を展開しており、地区外の消費者や大学との交流により、外部からの視点も取り入れ、住みよい高限を発信し、関係人口づくりに取り組んでいる。他協議会等の視察等を受け入れたり、市内外での事例発表に応じたりする等、

全国的にも模範となるむらづくり活動を展開していると思われる。

更に、指定管理業務やコミュニティビジネスによる自主財源の確保により、将来的には行政の交付金に頼らない自立した組織になることも期待される。

2. 農業生産面における特徴

(1) 高隈のシンボル「石蔵」を拠点とした活動による消費者等との交流

石蔵で開催した「高隈産業市」や「たかくま元気おこし祭り」では、地区内の農業法人等と連携して特産品のPRと販売を行い、地区内外からの誘客と農産物等の販売促進につなげることができた。

また、小中学生の食育や、福祉サロン、イルミネーションイベントの開催等、地区内外の市民交流の拠点として活用されている。



写真5 高隈産業市

(2) たかくまコミュニティ米（高隈米）の生産・販売

農業の後継者不足等により、休耕田の今後の利用意向等について調査したところ、利用の見通しがなかったことから、同協議会で田を再生し、「たかくまコミュニティ米」（以下、「高隈米」とする。）の名称で販売するようになり、高隈山系からの冷たく清純な水で育つ当地域の米は、その美味しさから鹿屋市のふるさと納税の返礼品にも選定される等、地域の自慢の一品となっている。



写真6 田植え行事とたかくまコミュニティ米

田植えや稲刈りの行事には、保育園児、小中学生、保護者、地域住民が多数参加し、食農教育の場になっている。

また、もち米も生産しており、中津神社で行われる300年の伝統行事「鉤引き祭り」で紅白もちにして奉納する等、伝統行事を継承する取組にもつながっている。

(3) 大学との連携による魅力ある地域資源の再発見・発信

鹿児島女子短期大学と連携協定を締結し、地区の食文化の発信及び文化・観光資源の再発見・創造により、関係人口増加につながるよう相互に連携した取組を実施している。

高隈米のブランド力を高めるため、学生と連携し、短大生のアイデアを活かした「おむすび」コンテストを実施し、「おむすび」が、関係人口の増加の「お結（むすび）」となることを目的としており、この取組により「おむすび」は地元飲食店や大学売店にて期間限定で販売される等、「高隈米」の知名度向上につながっている。



写真7 おむすびコンテスト

また、コミュニティの田んぼでの収穫行事等でも、学生と連携した里山ツーリズム等を実

施し、外部の視点やアイデアを取り入れた活動に取り組んでいる。

(4) 農業法人や国際交流機関・大学と連携した「里山ツーリズム」

地区内の農業法人や国際交流機関であるカピックセンター、鹿児島女子短期大学と連携し、地域資源や食材等を活用して滞在と体験をパッケージ化した「里山ツーリズム事業」のモニターツアーを行い、高隈のファンづくりに努めている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 高隈ツアー受入れのための環境整備及び山菜弁当がつなぐ地域の輪

名所を巡るまちなか散策コースとサイクリングコースを設置し、また、レンタサイクルを整備するなどし、交流人口の増加に努めるとともに、観光地への歩道の整備を行い、観光客の誘致に取り組んでいる。

また、旧高隈高校の家庭クラブで作られていた「山菜弁当」を復活させ、ツアー観光客等に販売している。地元で採れる山菜等を使ったヘルシーな弁当で、当時の味を再現した。レシピ考案から食材調達、製造まで全ての工程を地域で行うことにより、地域住民の交流のツールになっている。



写真8 復活した山菜弁当

(2) 買い物弱者のためのドライブサロンやささえあいマップ作成

高齢化率が年々高くなり、65歳以上の全員にアンケートを実施した結果、生活の困りごとについて、「生活必需品や食料品等の買い物に困っている」との回答が多く寄せられた。

そこで、地区内にある社会福祉法人や社会福祉協議会と連携し、バス路線のない3集落において、サロンと買い物支援を組み合わせた「ドライブサロン事業」を実施し、交通手段のない方々の買い物支援を実現した。

また、作成した「ささえあいマップ」を活用することで、生活に不便を感じている独居高齢者等の健康状況の確認や、生きがいつくり等、地域全体で見守る仕組みが機能している



写真9 ささえあいマップの作成

(3) 有償ボランティア「お助け隊あったかくマン」

全世帯向けのアンケートでは、「日頃の生活で、家族・親戚以外に支援を必要とする場面があるか」との問いに対し、「庭木の剪定、畑作業、買物などに不便を感じている」との回答が多く見られた。また「有償ボランティア活動をどう思うか」との問いに対し、22%の方が「やってみたい」と回答した。

そこで、有償ボランティア活動に意欲のある隊員を募り、お助け隊「あったかくマン」を創設し、大工仕事や



写真10 あったかくマン事業開始式

庭仕事、買い物支援等、住民の困りごとを有志 10 名がお手伝いする仕組みを構築している。

(4) 定住促進

農協事務所跡を「たかくまふれあい館」として改修し、高齢者のサロン活動や移住希望の方に対し、農業体験と宿泊ができる環境を整えている。

(5) 保全活動

高隈在住者を始め、観光で訪れた方々が、快適で住みやすい生活ができるよう、地域住民が一体となって保全活動を実施し、豊かな自然や美しい景色の維持・保全に努めている。